

高濃度ビタミンC点滴を中心とした、
注目の「がん治療」とは？

現代医療が追求する最大のテーマは「低侵襲」。患者の体に及ぶダメージを最小限にしつつ、治療効果を最大限に発揮させる——という、医療消費者のニーズに即した考え方だ。特に、がん治療における低侵襲治療の進化は顕著だ。内視鏡や腹腔鏡による手術は、従来の「大きく切る手術」と異なり、術後の回復期間を劇的に縮め、陽子線やサイバーナイフなど最新の放射線治療は、病変だけを狙い撃ちすることで、周囲の正常組織の損傷を小さくすることを可能にした。副作用が出ることが当たり前だった化学療法も、特定のがん細胞のみを攻撃する分子標的薬の登場で、がんを取り巻く医療の様相は一変したといっても過言ではない。

そんな中、アメリカで普及が進む、低侵襲がん治療が話題になっている。「超高濃度ビタミンC点滴療法」と呼ばれるものだ。その名の通り、きわめて濃度の高いビタミンC（アスコルビン酸）を配合した輸液を点滴で静脈に注射することで、がん細胞の動きを封じ込める働きがあるという。早期がん治療、外科手術に先立って行われる術前療法、術後のフォローアップ、化学療法や放射線治療との併用、そして、従来の考え方は「治療法がない」と見なされる高いステージの進行がんを含む、さまざまな状況に対応する治療法として注目されているのだ。

点滴療法研究会

高濃度ビタミンC点滴を中心とした、注目の「がん治療」とは？

がんを抑制しQOLを改善する臨床データが発表され、アメリカで10年前から急速に普及している高濃度ビタミンC点滴療法。日本でこの治療法に早くから注目し治療にもあたっている、点滴療法研究会の柳澤厚生医師に話を聞いた。

手術のように皮膚を切ることもなければ、抗がん剤のような副作用もない。約1時間、ベッドからクライニングチェアに休みながら、点滴を受けるだけでがん治療ができる低侵襲治療と言える。

しかし、なぜビタミンCを点滴するだけで効果が出るのだろうか。

「この治療に使うビタミンCは、1回あたり50〜100グラムという『超高濃度』。レモン2500〜5000個分にも相当する量のビタミンCを、口からではなく直接点滴で静脈に投与することで、血中濃度を大幅に高めることができるのです」

そう語るのは、点滴療法研究会会長で杏林大学元教授の柳澤厚生医師。「ビタミンCの血中濃度が高まると、その成分は血管の外に沁み出し、過酸化水素という活性酸素を作り出します。この過酸化水素ががん細胞に取り込まれると、がんは活動性を大幅に抑え込まれて『細胞死』に向かうことになると考えられるのです」

アメリカでの事例が豊富な、早期における術前療法。

具体的な治療法を見ていこう。すでに触れた通り、この治療法は早期がんから進行・転移がんに至る、どの段階のがんにも導入可能だ。

しかし柳澤医師は、「がんが見つかった段階」ですぐにスタートするのが理想的だという。

高濃度ビタミンC点滴療法の臨床研究

*論文として公開済み
**Cancer Treatments for America病院グループ

■肺がん

アイオワ大学(米国・2015)
クリフォード病院(中国・2016)

■大腸がん

ジェファーソン大学(米国・2011)

■胃がん

トーマス・ジェファーソン大学(米国・2011)*
カンザス大学(米国・2011)
Eastern Regional Medical Center
(フィラデルフィア)(米国・2012)*
アイオワ大学(米国・2014)

■肝臓がん

トーマス・ジェファーソン大学(米国・2012)

■乳がん

CTA** (シカゴ)(米国・2016予定)

■卵巣がん

カンザス大学(米国・2005)*

■前立腺がん

コペンハーゲン大学(デンマーク・2010)
ジョンスホプキンス大学(米国・2015)

■悪性リンパ腫

東海大学医学部(日本・2008)*

■化学療法抵抗性がん

ジュリーッシュ総合病院(カナダ・2010)*

■脳腫瘍(神経膠腫)

アイオワ大学(米国・2014, 2016)*
ネブラスカ大学(米国・2014)

■安全性試験

マギル大学(カナダ・2008)*

■がん患者のQOL

点滴療法研究会(日本・2010)*

■治療抵抗性がん

マギル大学(カナダ・2010)*

オタゴ大学(ニュージーランド・2014)*

■末期固形がん

CTA** (シカゴ)(米国・2006)*

「アメリカでは、手術に至る前の術前療法の段階で、化学療法と高濃度ビタミンC点滴療法を組み合わせるケースが増えています。この治療法は、併用する他の治療法をアシストする効果が高く、また長期にわたって治療を続けても耐性(薬理効果が減少すること)が生じません。その意味でも、早期における術前療法ではきわめて有益な治療法といえます」

アメリカで進行中の基礎実験では、



柳澤厚生 Atsuo Yanagisawa * [点滴療法研究会 会長]

杏林大学医学部卒、同大学院修了。医学博士。元杏林大学保健学部救急救命学科教授(1999~2008)。米国先端治療会議認定キレーション療法専門医(CCT)、アメリカ心臓病学会特別正会員(FACC)。国際統合医療教育センター所長、スピークサロン・メディカルクリニック理事長、国際オーソモレキュラー医学会会長を務める。

手術に先立って高濃度ビタミンC点滴療法を行うことで、その後の転移のリスクが低減するという報告があり、放射線治療との併用においては、放射線が照射された正常組織の修復に、ビタミンCが効果的に作用するとの見方もあるという。

がん治療は、早期に的確な判断ができるか否かで、予後の経過が大きく左右されるだけに、まずは知識として、高濃度ビタミンC点滴療法の存在を知っておくことが重要なのだ。

別表のように、現在日本を含む世界各国で高濃度ビタミンC点滴療法の臨床試験が進行中だ。

「非常に珍しい一部のがんを除くほぼすべてのがんに対して、高濃度ビタミンC点滴療法が高い有効性を示

すことが分かっています」と柳澤医師。しかし、その投与法には微妙なテクニクが必要であることも指摘する。

「腫がんのような進行の早い病気には点滴を連日行うのに対し、前立腺がんのように、ゆっくり進行するがんには、週1回程度の投与が基本。進行の度合いやステージなどを考慮しながら回数や投与量を調整していく必要があります」

QOLの有効性を示す、高濃度ビタミンC点滴療法。

もう一つ、高濃度ビタミンC点滴療法の有効性が示されているものに「QOL(人生と生活の質)の改善」がある。たとえ病気の進行が抑えら



れていても、がんによって引き起こされる痛み(がん性疼痛)が強いと、それだけで日常生活には大きな支障が出るが、高濃度ビタミンC点滴療法は、痛みの緩和にも効果的な働きを示すという。

「点滴の投与前後を比較しただけでも痛みの強さが大きく軽減したという患者は少なくない。肺がんで強い呼吸苦がある人が、点滴後には咳も治まって当人も家族も驚くこともある。これらは高濃度ビタミンCの持つ急性の抗酸化作用によるものと考えられています」

柳澤医師らの研究グループでは、高濃度ビタミンC点滴療法によるQOL改善についての臨床試験を行っているが、高い有効性が確認されたという。

「がん治療とQOLの改善を目的とする場合、週2~3回の投与を、まずは3カ月続けたところで効果を確認しますが、多くが治療開始前と比べて食欲が出ている、倦怠感が消失し、痛みが軽減している——などのQOLの改善を実感しているのです。これに食事療法や栄養療法、さらに

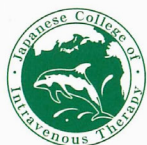
はメンタル面からのアプローチなどを組み合わせることで、たとえ進行がん、転移がんであっても、日常生活の支障を少なくすることは可能です」

効果と安全性に優れた高濃度ビタミンC点滴療法だが、「治療」である以上、注意すべき点はある。

「たとえば、多発性骨髄腫の治療に使われるベルケイドや、慢性白血病治療に使われるメソトレキセートなどは、高濃度ビタミンC点滴療法と併用することで重篤な副作用を生じる危険性があるので避けなければならぬ。また使用する製剤についても、私たち点滴療法研究会の全国650施設の会員クリニックでは、添加物の入っていない国産製剤は避け、添加物の入っていない製剤を海外から輸入して使用しています」

がんに対する低侵襲治療として注目される高濃度ビタミンC点滴療法は、国内でも臨床導入する医療機関が増えている。がんが「身近な病気」である今、この療法がより「身近な治療」になる日も近いのではないだろうか。

問い合わせ先



点滴療法研究会

[運営元会社]
有限会社メディカルリサーチ21
Tel: 03-6277-3318

以下URLから、ビタミンC点滴療法を採用している病院を検索できます。
<https://www.iv-therapy.org>



点滴療法研究会

〔運営会社〕

有限会社メディカルリサーチ 21

TEL：03-6277-3318

以下 URL から、ビタミンC 点滴療法を採用している病院を検索できます。

<https://www.iv-therapy.org>